

ドイツの「自然に近い森林業」



風倒木被害(2000年)の跡地、
バーデン・ヴュルテンベルク州
2002年7月撮影

文と写真●堀 靖人 Hori Yasuto

森林研究・整備機構フェロー
東北農林専門職大学森林業経営学科教授

林 学の発祥地であるドイツでは針葉樹を植えて収穫する林業がいち早くから行われ、この針葉樹林業は近代においてドイツ林学とともに世界中へと広まりました。ところが、いま世界各地でこれらの近代林業の見直しが進んできています。

ド イツの森林を数十年前から振り返ると、災難続きでした。戦争による森林の荒廃、酸性雨による被害(1980年代)、頻発する風倒木被害(1990年代)、乾燥害とキクイムシ被害の拡大などです。さらに今後も温暖化による森林へのストレスの高まりが危惧されています。

こ うした時代にあつて、長期にわたる森林づくりを考えるためにみつけた答えの1つが「自然に近い森林業」です。その源流は林学者アルフレッド・メーラーの「恒続林」に行きつきます。恒続林とは、森林を多様な生物からなる有機体と見なし、自然の道理に合わせた森林への働きかけを行いながら木材生産をめざす林業のやり方です。

自 然に近い森林業は、酸性雨が社会問題となり、風倒木被害が多発した時代に注目され始めました。針葉樹による単純な林からかつてのドイツの森林の姿であった混交林へと回帰することをめざしたのです。天然更新や皆伐回避、化学物質の不使用といった対策をとることで、より多様性の高い、さまざまな生き物にすみかを提供できるようになりました。こうしたエコロジックとエコノミーとの折り合いをつける森づくりの考えは、未来へ向けて持続的な社会をつくるための指針ともなるでしょう。♥



多様性を高めるために森林内に
意図的に残された枯死木、
バイエルン州
2022年10月撮影



天然更新のためのブナの稚樹、
バーデン・ヴュルテンベルク州
2012年3月撮影